

II 事例集

1 女性の再就職・転職支援

(1) 日本女子大学リカレント教育課程 女性のための再就職支援プログラム

実施主体	学校法人 日本女子大学 生涯学習センター
対象者	出身校を問わず 4 年制大学を卒業し、就業経験がある女性
目的	大学が、卒業後も社会の変化に対応した学びの場を提供し、充実したキャリアを持てるように、生涯にわたって支援を行う。
実施時期	2007 年 9 月、文部科学省委託事業として開始（現在は、日本女子大学の独自運営）。1 年間の通学プログラム（2015 年度まで 4 月入学、9 月入学の 2 回募集。2016 年度より 4 月入学のみに変更）
事業内容	<p>「再教育」「再就職支援」の 2 本を柱に、女性のキャリア支援を行う 1 年間の通学教育課程</p> <p>【再教育】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラム：キャリア・スキル科目群、キャリア形成科目群、キャリア基礎科目群で構成 ・修了要件：必修 7 科目 14 単位（147 時間）、選択必修 7 科目 14 単位（147 時間）、合計 14 科目 28 単位（294 時間）を修得すること ・その他：日本女子大学 4 学部の授業を履修可 <p>【再就職支援】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学内での合同会社説明会、独自の求人 Web サイトでのマッチング ・再就職イベントの開催 ・就職活動相談、就職相談、求人紹介などの支援
定員	40 人
参加費	検定料 3,000 円 入学金 20,000 円 前期：120,000 円 後期：120,000 円（2 期に分割して納入）
情報掲載 URL	http://www5jwu.ac.jp/gp/recurrent/
協働先について	東京商工会議所会員 授業での連携＝日本レコードマネジメント株式会社、一般社団法人中高年齢者雇用福祉協会（JADA）、合同会社西友
実績	入学者数：455 人 入学者出身大学・大学院数：122 校 （第 1 回生 2007 年 9 月入学～第 18 回生 2016 年 4 月入学） 文部科学省「職業実践力育成プログラム」（BP）認定 厚生労働省「専門実践教育訓練指定講座」
直接事業経費	—
財源	—

1 事業の背景

(1) リカレント教育課程の経緯

日本女子大学のリカレント教育課程（以下、リカレント教育課程）は、文部科学省 2007 年度「社会人の学び直しニーズ対応教育事業委託」に応募して採択された「キャリアアップ中の女子大学卒業生のためのリカレント教育・再就職あっせんシステム」からスタートした。多くの優秀な女性が結婚、出産などでキャリアを中断している状況があったため、再教育によって社会復帰を支援することを目的としたプログラムが必要とされていた。

2007 年 12 月、改正学校教育法によって、社会人にプログラムを提供し、履修証明を授与する課程の設置が認められた。2008 年 4 月、日本女子大学はリカレント教育課程を大学の課程として設置し、2010 年 3 月からは、日本女子大学生涯学習センターの一部門として独自に運営している。2015 年 12 月には文部科学省が定める「職業実践力育成プログラム（BP: Brush up Program for professional）」（以下、BP）に認定されたほか、2016 年 1 月には厚生労働省「教育訓練給付金制度（専門実践教育訓練）」に基づく講座としての指定を受けた。

(2) 受講者の多様化

当初の受講者は日本女子大学の卒業者が中心だったが、第 3 回生以降は、他校出身者も増加し、過去 5 年では本学卒業者は 16%となっている。2007 年 9 月入学の第 1 回生から 2016 年 4 月入学の第 18 回生まで、122 大学の卒業者を受け入れた。また、大学院を修了した方も増えている。受講者の専攻分野は文系から理系まで幅広く、多様な基礎学力を持つ女性が受講している。

また、キャリアに空白がある女性を想定してスタートしたプログラムだが、近年、直前まで働いていたという受講者も増えている。育児休業中の女性もいれば、独身で継続して働いてきた女性がキャリアチェンジのために受講する、就職難の時代に社会に出て、非正規雇用を重ねてきた方が正規雇用の職を得るためにブラッシュアップするといったように、受講動機や受講者の背景が多様化している。教育訓練給付金制度の指定講座となり、受講前に働いていて、雇用保険の一般被保険者だった受講者は、専門実践教育訓練給付金を受けられるようになった。



2 事業内容

総合的なリカレント教育による学び直しと再就職支援とを行う、1 年間の通学プログラムである点が特色である。修了には年間で合計 28 単位（294 時間）の修得が必要なハー

ドなカリキュラムで、前期・後期の2期制をとっている。生涯学習センター運営委員会に、各学部の教員数人で構成するリカレント教育課程の委員会が設けられており、カリキュラムは同委員会で検討して決定している。講師はほとんど、学外の実務専門家に依頼している。受講者のニーズと一つひとつの科目の目的の検討、求人側の人材ニーズの変化についての聞き取りなどを踏まえて、委員全員で議論を重ねてカリキュラムを構築している。

(1) 1年間の通学プログラムという設定

他大学では半年のプログラムも実施されているが、特にブランクがあったり、前職と異なる仕事に就きたいという、ジョブチェンジを目的とする女性にとっては、1年間が必要と考えている。通学は通勤の模擬体験になり、働き始めると、家族との生活がどうなるのかについてシミュレーションする機会となっている。1年間の課程を修了できたという経験は、大きな自信につながる。また、20代から50代まで多様な背景の人たちと一緒に学ぶメリットは大きく、再就職を目指してレベルアップし合う仲間との連帯感が培われる。

(2) 募集・選考・費用

2015年まで4月入学と9月入学の2回、募集・選考を行っていたが、2016年4月入学（第18回生）から、年1回の募集・選考に変更した。選考は、英語筆記試験とPCテスト、面接によって行っている。面接では、かなり厳しいカリキュラムであることを説明して、受講へのモチベーションを確認している。費用は入学金2万円と、前期・後期の受講料各12万円である。第18回生の募集には、定員40人を超える73人の応募があり、56人が入学し、2017年1月現在55人が在籍している。

広報は、新聞広告の掲載等も行っているが、近年、TV、雑誌等で取り上げられる機会が増えた。内閣官房働き方改革実現推進室主催「働き方改革に関する総理と現場との意見交換会（第1,4回）」に、リカレント教育課程修了者、受講者、担当職員が出席するなど、社会的に注目されるようになってきている。情報を得てすぐに説明会に参加する人と、家族の状況も含めて1年、2年単位でじっくり時間をかけた考えた後、やはり再就職するためには再教育が必要であることを見極めてから行動する人と入学経緯はさまざまである。

(3) カリキュラムについて

① 必修カリキュラム構成：3つの柱を中心に

現代社会で通用する力を身につけるために、3つの柱を中心に必修科目のカリキュラムを組み立てている。1つ目の柱は英語コミュニケーション力、2つ目の柱はITリテラシーで、それぞれカリキュラムの3分の1を占めている。グローバル化の時代には、ビジネス界で通用する英語力とITリテラシーを身につけることが不可欠であるという考え方に基いている。3つ目の柱はキャリアマネジメントで、働くことをめぐる現在の社会状況を知り、自分の能力や適性を見つめ直したうえで、再就職へ向けて必要なスキルを身につける内容である。キャリアマネジメントの授業ではグループワークを取り入れ、自己開示しつつ互いに傾聴し合う訓練も行う。

② ビジネス界で必要とされる知識・スキルの基礎を学ぶ

ビジネス科目としては、企業会計、簿記、金融など商学や経営学領域の基礎科目を多く取り入れている。これからの社会で必要とされると思われ、汎用性が高い資格を取得するための準備講座も実施している。たとえば、企業のガバナンスが重視されるようになっていくことから、組織内で監査が行える公認内部監査人資格を持つ人材へのニーズが高まっている。この資格取得には実務経験が必要だが、その準備として基礎知識を学ぶため講座を実施している。また、情報セキュリティへの関心の高まりから、記録情報管理者資格保有者へのニーズも高いことから、同資格準備講座を行っている。

第18回生からは、ビジネスシーンや、就労後の文書作成に備えて正しい日本語でのコミュニケーションができることが必要であるという認識から、日本語コミュニケーション論の科目を新設した。

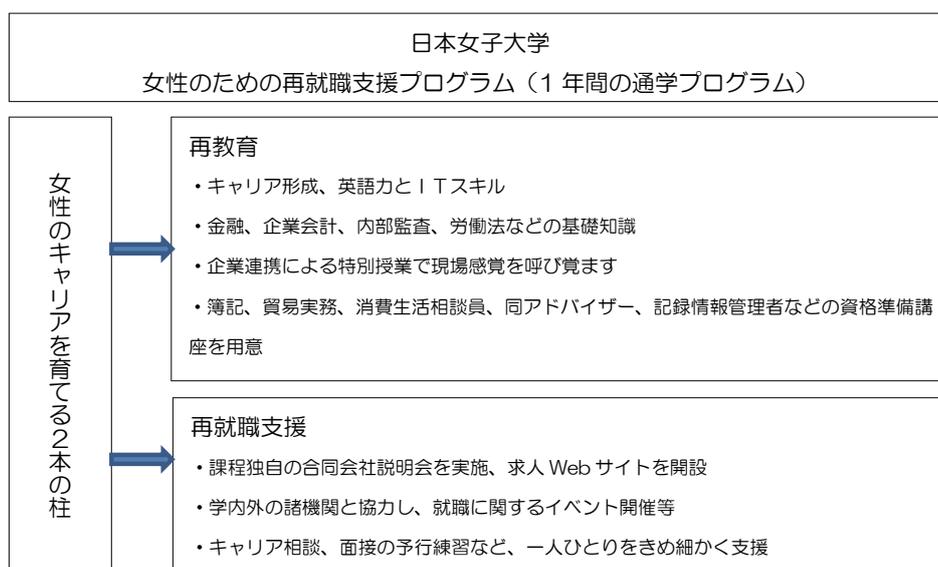
③ その他

リカレント教育課程受講者は、学部の科目単位履修について、1万円で受講できるメリットを設けている。本学には通信教育課程もあり、スクーリングの受講もできる。このほか、図書館等の大学施設も利用できる。

(3) 再就職支援

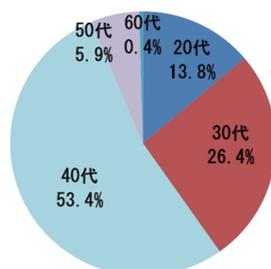
後期修了前に、学内で合同会社説明会を実施しているほか、独自の求人 Web サイトを開設している。日本女子大学現代女性キャリア研究所とは緊密に連携しており、シンポジウムやゲストスピーカーによる公開講演会を開催している。民間企業による体験型プログラムに受講者が一定期間参加したこともある。

日常的な支援としては、キャリアカウンセリング、応募書類の添削、面接の練習などを行っている。これらの支援は修了した後も利用できる。1年間という期間設定は、リカレ

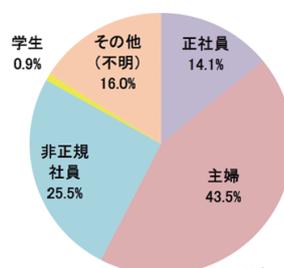


受講生に関するデータ

受講開始時の年齢



受講開始時の職歴



2017年2月20日時点でのデータ

ント教育課程担当者が受講者一人ひとりの人物像を深く知ったうえで、トータルにバックアップすることを可能にしている。受講者が置かれた状況は個別なので、修了後の進路や働き方は、本人の意向を大切に支持している。パートナーや子どもがいる女性にとって、働くことと家族の都合の調整はいまなお大きな課題になっている。フルタイムで就労しても、本人だけでなく家族にとっても通学中の生活と大きな変化がなかったため、スムーズに移行できたという人もいれば、家族の事情で残業が難しいため、あえて非正規雇用を選択する人もいる。

3 成果と課題

(1) 成果

本学のリカレント教育課程は、「柔軟な学びと働き方」という新しい価値を社会に提示してきたと考えている。昨今では、メディアの取材も増加し、本学が蓄積したデータは、政府の政策立案にも活用されている。しかし、文部科学省の事業が終了して独自運営になって受講料を値上げした時や、リーマンショックや東日本大震災の後には、受講者が減少した時期もあった。受講者の再就職が難しい事態も経験してきたが、そうした経験を踏まえて、カリキュラムの充実が図られ、受講者に対する大学側の向き合い方も鍛えられ、ノウハウが蓄積されてきた。きびしい時期を乗り越えて10年間継続してきたことが、なによりの成果である。

(2) 課題

① 再就職を目指す女性への企業側の理解

あらゆる機会を捉えて企業にコンタクトしているが、求人情報を集めるのは容易ではない。採用実績がある場合であっても、欠員補充が原則の企業が多く、継続的に求人が寄せられるとは限らない。管理職と年齢が逆転するといった理由から、キャリアブランク後の女性の採用に、経営者層が前向きでない企業もある。こうした状況を変えていくためにも、企業との連携は非常に大切だと考えており、社会に出た時に何が必要かについて、具体的に採用側の意見を聞いて、取り入れられる事柄はカリキュラムに反映させている。

② 受講者の多様性への対応

直前まで働いていた人の受講が増加するといった変化によって、学び直しの意味合いが、キャリアチェンジも視野に入れたものに変化してきている。IT スキルや簿記の知識など、受講者の間でレベルの差が見られるようになっており、こうした事態への対応として、クラス分けを実施し、その成果を今後検討する。

(3) 今後へ向けて

大学でリカレント教育課程を実施している意味は、特定のスキル習得や資格取得ではなく、幅広い人を受け入れて、総合的な人間力を育てていくことにある。社会のニーズをキャッチしつつ、受講者の要望も大切にしていくのが基本であると考えている。今後も試行錯誤を続けて、さらに充実したプログラムにしていきたい。

【修了生の声】

* 日本女子大学リカレント教育課程ホームページより、ご了解を得て転載しています。

<http://www5.jwu.ac.jp/gp/recurrent/shuuryousei.html>

第 15 回生（40 代）2015 年 9 月修了

リカレント教育課程が始まると、今までと生活が変わります。授業も大変です。けれど変化を恐れずに色々な方の人生に触れ、又自分を振り返ることで必ず得るものがあると思います。

第 15 回生（40 代）2015 年 9 月修了

年齢やキャリア等が皆違っているところが、とても良い。将来に向けてもう一度学びたいという真剣な気持ちは共通でした。そのような仲間達と集い、助け合い、思い切りガリ勉し、学食では楽しく情報交換。お互い見守り、時には手を差し伸べるなど、人との距離感が絶妙な方達ばかりで人格者！設備、環境、スタッフの皆様のサポートも手厚く「この上なく充実した大人の学びの場」それがリカレントでした。

第 15 回生（40 代）2015 年 9 月修了

リカレント教育課程は職業斡旋所ではありません。通えば資格が取れて仕事が見つかるわけでもありません。自分自身でつかもうとする意欲があれば支援を受けられ励ましてくれる仲間に出会える場です。若い頃と比べて衰えた暗記力や集中力は目的意識と仲間が補ってくれます。一步踏み出す勇気と自分への投資額を回収する意欲がある人は必ず満足いく時間を過ごし次のステップに向かえますので、挑戦してみてください。

第 14 回生（50 代）2015 年 4 月修了

同じ目標を持った仲間との勉強は無償で互いに教えあったり、乗り越えようとするハードルを越えたことの喜びは大きい物です。

女性のための再就職支援プログラム

日本女子大学リカレント教育課程

一年学んで、新しい私、新しいキャリア!

近年、「女性の活躍推進」が謳われ、女性の生き方が大きく変わりつつあります。

「私の人生、今のままでよいのかしら?」と迷っている女性も少なくありません。

日本女子大学リカレント教育課程は、大学卒業後に就職しても育児や進路変更などで離職した女性に1年間のキャリア教育を通して、高い技能、知識と働く自信、責任感を養い、再就職を支援するプログラムとして、いち早く2007年にスタートしました。社会の変化に対応した新しいあなたの発見と、充実したキャリア(生き方)を応援します。

日本女子大学は、卒業生はもとより、すべての女性にとって、人生航路の必要な時に立ち寄り、休息し、給油し、糧食を得て次の航海に再出発できる港になりたいと願っています。

結婚・出産・介護などのブランクを経て社会復帰したい!
あなたの「眠っている力」を今こそ開花させませんか?

〈女性のキャリアを育てる2本の柱〉

再教育

- 現代社会で必須の英語とITのほか、金融、企業会計、内部監査、労働法などの基礎知識を幅広く身につけます。
- 企業との連携による特別授業で現場感覚を呼び覚まします。
- 簿記、貿易実務、消費生活相談員、同アドバイザー、記録情報管理者などの資格準備講座もあります。
- その他、日本女子大学4学部の授業も履修できます。

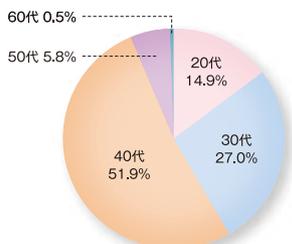
再就職支援

- 2期目修了前に、大学内で課程独自の合同会社説明会を実施し、独自の求人Webサイトを開設しています。
- 学内外の諸機関とも協力して、就職に関するイベントの開催などの支援事業を行っています。
- キャリア相談、面接の予行演習など、受講生、修了生一人ひとりに対するきめ細かな支援をしています。

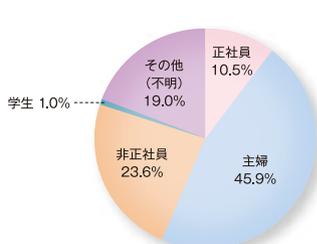
受講生に関するデータ

全入学者合計 399名 (2007年9月～2015年9月入学)

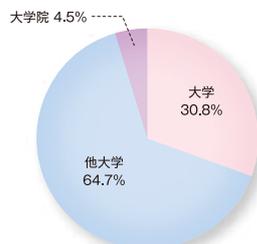
受講開始時の年齢



受講開始時の職業



出身大学



応募の動機

- ▶ 再就職に必要なビジネススキル・知識を修得したい。
- ▶ 転職するためにスキルアップしたい。
- ▶ 自分にあった再就職について知りたい。
- ▶ 学ぶことで仕事復帰することに対して自信をつけたい。
- ▶ 10年後の自分の生き方、働き方を考える機会を持ちたい。

108大学・大学院 出身者が入学 (2007年9月～2015年9月入学者)

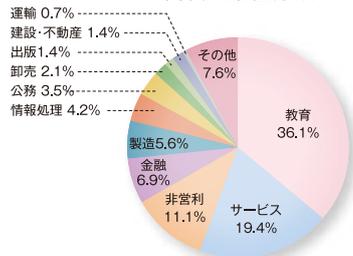
入学出身者数上位の大学 (日本女子大学以外)

- | | | | | |
|-----------|----------|-------------|------------|-------------|
| 1. 慶應義塾大学 | 3. 上智大学 | 7. 青山学院大学 | 7. 法政大学 | 13. 国際基督教大学 |
| 2. 東京女子大学 | 5. 立教大学 | 7. 日本大学 | 11. 明治大学 | 13. 中央大学 |
| 3. 早稲田大学 | 6. 学習院大学 | 7. フェリス学院大学 | 12. 共立女子大学 | 13. 同志社大学 |

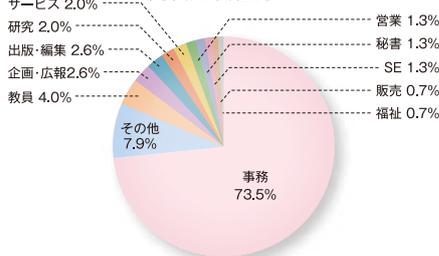
修了生に関するデータ

(2015年9月末現在)

就職先業種分類



就職先職種分類



リカレント教育課程の一年

〈リカレント受講生 年間スケジュール〉



開講式



修了式



企業連携 セルフリーダーシップ・プログラム



カリキュラム	月	再就職支援
(入学試験)	2	
(入学手続き)	3	
開講式 履修ガイダンス リカレント科目履修登録 学部科目等履修登録(希望者) 1期目授業開始	4	「キャリアマネジメントⅠ」 授業において再就職準備 (4月～7月)
生涯学習センターリカレント連携講座 (5月～7月土曜開講・希望者)	5	
	6	再就職支援イベント開催
1期目授業終了・定期試験 期末ガイダンス	7	
夏季休暇 通信教育課程スクーリング 聴講(希望者) 学部夏期集中授業(希望者)	8	
企業連携夏期集中授業開講 ITリテラシー補講(対象者) 2期目ガイダンス 履修登録 2期目授業開始	9	「キャリアマネジメントⅡ」 授業において実践的な 再就職準備 (9月～1月)
	10	修了生懇話会 修了生・受講生交流会 再就職個人面談期間 再就職 WEBアカウント交付
通信教育課程スクーリング 聴講生(希望者)	11	
冬季休暇	12	冬季休暇
2期目授業終了・定期試験 期末ガイダンス	1	期末ガイダンス (再就職活動、求人説明、 合同会社説明会参加について説明)
	2	合同会社説明会開催 再就職活動支援 (就職活動相談、求人紹介)
春季休暇	3	
修了式	3	
	修了後	再就職活動支援 (就職活動、就職相談、求人紹介) 合同会社説明会参加 再就職イベント案内



ビジネス英語



記録情報管理者資格準備講座



社会保険法・労働法・労働保険法



キャリアマネジメント



ITリテラシー

授業風景



再就職支援イベント

授業時間
1科目21時間(14回)

- 1時限目 9:00～10:30
- 2時限目 10:40～12:10
- 3時限目 13:00～14:30
- 4時限目 14:40～16:10

※夏期集中授業は開講時間が異なります。
※土曜日開講のリカレント連携講座は開講時間が異なります。

●お子様の小さい方は1～3時限目に履修。

(2) 子育て支援を“仕事”にする！ —親も子もハッピーになる新しい支援のカタチ—

実施主体	札幌市男女共同参画センター
対象者	これから子育て支援に仕事として携わりたいと考えている女性
目的	子育て支援を仕事としてキャリア形成していきたいと考えている人を対象に、子育ては男女が共に担い、性別役割分担意識にとらわれずに関わるのが重要との認識を深めること
実施時期	2016年2月23日（火）～3月3日（木）
事業内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 平日の日中、4回の連続講座 ・ 講師は大学の教授や、実際に子育て支援で起業し活躍している方 ・ 第1回～第3回まではワークショップを取り入れた講義形式で行った。 ・ 最終回では、自分が行いたい支援のカタチを探す場、アクセスできる場の提供として、子育て支援団体との情報交換会を行った。 <p>第1回 「子育てはママだけがするもの？」 第2回 「家庭から地域へー子育て支援の多様化ー」 第3回 「支援者が関わることで、つながる親子の成長」 第4回 情報交換会 「子育て支援団体緒との交流の場」</p>
定員	第1回～第3回 15人、第4回 30人
参加費	1,800円
情報掲載 URL	http://www.danjyo.sl-plaza.jp/event/jinzai/
協働先について	なし
実績	—（2016年度実施事業のため）
直接事業経費	190千円
財源	指定管理料

1 事業の背景

日本では、母親による保育こそが子どもの心身の成長に最良であり、特に幼い子どもは母親が保育すべきという、いわゆる“3歳児神話”が社会通念として流布しており、いまだに払拭できていない。しかし、子育てに多様な大人が関わることで子どもがさまざまな価値観に触れ、心の成長につながることを期待される。

子どもの保育は母親が無償で担うのが一般的だとする考え方がいまだに根強い中で、母親である女性たちが社会参画を継続し、自己実現や経済的自立ができる仕組みが必要であるが、上記の“3歳児神話”や周囲の無理解により子どもを託児することを後ろめたく感じる女性も多い。託児を後ろめたく思う意識を解消していくと同時に、プロによるクオリティの高い保育の有効性についての認識を高めていく必要がある。

また、これまで、母親による無償労働が当然視されてきた経緯から、保育者の賃金は安く抑えられてきた。こうしたあり方を見直し、ボランティアではなく正当な労働の対価を受け取れるようにしていく必要がある。

さらに、多様なライフスタイルや働き方に合わせて、従来の画一的な保育システムを見直し、さまざまにカスタマイズできる保育の仕組みを見出すことも必要である。

これらのことから、札幌市男女共同参画センター（以下、センター）では、子育て支援のさまざまな形を紹介し、女性たちの自己実現を応援する保育者を育成する事業を企画した。

本事業は、保育をとおして新しい支援の仕組みを創造する意欲を持つ人材を発掘するとともに、潜在保育士など、資格を有しながら生かせていない女性の活躍推進も目的として企画された。

2 事業内容

(1) プログラム

全4回の講座は、将来へ向けてのビジョンを描くために、基礎的な学習と実践者からの情報提供に加え、ネットワーク作りのための交流を組み込んで構成されている。

事業の企画はセンター指定管理者のプロパー係長の指示とアドバイスに基づいており、各回の運営は担当者とサブ担当者で行った。



① オリエンテーション・「子育てはママだけがするもの？」

初回は、神戸親和女子大学の勝木洋子教授の講義により、現代の子育て支援の概要や課題、母親だけが担う子育てからの意識変革の必要性について学んだ。受講者自身が成長過

程で無意識に刷り込まれているジェンダーに気づき、子育てに支援者や他者の力を借りることや子育てに多様な人がかかわることの有効性、これからの社会の変化に対応できる保育の考え方を学んだ。

また、受講者の不安を取り除き、2回目以降の受講へのモチベーションを高めるため、オリエンテーションを組み入れた。

② 「家庭から地域へー子育て支援の多様化ー」

2回目の講師である、合同会社「のこたべ」代表取締役の平島美紀江さんは、事業所内保育所の運営を受託した経験を踏まえて、開設までの試行錯誤や運営に伴う課題、そしてそれらを乗り越える支えとなった、子育て支援への信念など熱い思いを受講者に伝えた。

平島さん自身は子育て期に働きたい意欲と反比例して周囲から強い圧力を受け、そのときに不満と疑問を感じたという。そこで、次世代には同じ苦勞をさせたくないという強い思いで支援を行ってきた。

親子や家族のあり方は画一的なものではなく、それぞれの家庭によって違うことを理解しながら支援することが重要であること、家庭の中だけではなく、地域ぐるみで子育てを担っていくことが有効であることについての言及もなされた。そして、こうした子育てのあり方の定着を目指して精力的に行っているイベント実践例についての情報提供があった。

③ 「支援者が関わることで、つながる親子の成長」

3回目に講師に迎えた、一般社団法人「ぽんぽんはーと」代表理事の魚岸あや子さんは、子ども過ごす時間の確保と働きたい自分との折り合いをつけるために、子育て期に深夜の仕事を選んだ経験がある。やれること、やりたいことを模索した結果、ベビーシッターという業態を選んだ理由、事業の発端とその進捗、そしてこれまで寄り添ってきた家庭と子どもの成長を語った。

保育所とは違い、各家庭に出向いて保育をするベビーシッターは、家族が暮らす環境の中に入っていくことになる。日々の暮らしの中で、子どもの成長を親と共有し、長期的なスパンで家族に関わることができる。

ベビーシッターの役割は単に子どもの世話をするだけではなく、家族に寄り添う第3者として、時には子どもからの打ち明け話を聞く役であり、また別な場面では、母として、妻として、社会人としての役割葛藤に悩む母親の話し相手となる。魚岸さんの講義は、家族にとって親しい関係にある第3者という立場が、親と子を結ぶ機能を果たすことに役立つという、新たな視点を受講者に伝えた。

④ 情報交換会

最終回には受講者一人ひとりが自身のプロフィールと今後のビジョンを発表した。また、子育て支援を行っている4団体を招いて、情報提供を行い、受講者と団体とのマッチングの場とした。

4 団体のうちのひとつである、NPO 法人「こども學舎」理事の河村泰隆さんからは、NPO で初めて保育士の資格を取得できる養成施設を開設した経緯と、施設の場の活用について情報提供がなされた。「こども學舎」のカリキュラムは午前中のみで、通学する生徒は午後の時間にアルバイトなどで働きながら保育士の資格が取れるようになっている。講師からは、午後の時間帯に「こども學舎」の施設を、保育の場として活用することもできるなどの提案があった。

(2) 参加者

広報については行政発行の広報誌、公共施設 120 カ所のチラシ配架、SNS や報道機関へのプレスリリースなどを活用した。参加者の 50% が広報誌で情報を得ていた。

20 代後半から 70 代以上まで、幅広い年齢層から参加があった。30 代後半が 28%、次いで 50 代と 70 代以上がそれぞれ 17% で、約半数が保育士資格を持ち、保育の仕事を経験していた。

就労状況については、専業主婦が 57%、次いでパート／アルバイトが 22% だった。興味のある分野は、子育て支援と子ども／教育分野の合計で 42% を占めた。

参加の動機では「講師の話を聞きたい」「内容に興味関心がある」が多く、次いで「悩みや問題を解決したい」が上位を占めた。

仕事として保育に携わりたいという人と、社会参画していきたいという思いと母親役割の葛藤を抱えている子育て中の当事者の両者が参加した事業となった。

(3) 参加費

講師を招いての講座については、札幌市男女共同参画センターの受講料規定に基づき、時間単位で参加費を徴収した。(2 時間×全 4 回＝1,800 円)

3 成果と課題

(1) 受講者からの評価

受講者からの反響で大きかったのは、託児は子どもにとってかわいそうなことではなく、親子ともに豊かになる経験をもたらすという、同じ意識をもった方と知り合う機会を得られたという声である。こうした受講者の声からは、子育ては母親の役割であるという社会通念の根深さ、子育て中の母親の孤立感があらためて浮き彫りになった。本事業が、子育てを社会に拓くという視点とともに、参加者同士のつながりを生み出す契機となったことは成果といえる。

(2) 事業の「出口」についての支援

ネットワーク構築の場として実施した情報交換会では、事業所内保育を行っている団体と保育士資格を生かしていない方とのマッチングができた。また、本事業は保育分野での起業も想定していたため、センターの“女性のためのコワーキングスペース「リラコワ」”

を紹介し起業に向けて、仲間と出会い協働を生む場の活用につなげることができた。

NPO 法人「こども學舎」からの場所の活用についての提案は、フリーランスで保育事業をしている方にとって朗報となり、その後、交渉へ結びついた。

(3) 課題

前年度から2年にわたり継続で行ってきた保育者支援のこの事業では、保育を切り口に同様の思いを持つ方々を結びつける貴重な機会提供ができたが、受講後の追跡調査や実施後の継続支援が今後の課題である。



4 受講者からの感想・メッセージ

- 「心に寄り添うこと、親にも、子にも」とのお話に何度もうなずきました。実際自身の子育てを振り返っても、子育て環境はどんどん変化していると実感しています。情報が多く、孤立しがちな保護者に寄り添って支援していくことの大切さを学びました。
- 女性が働き、活躍する時代が来てほしいと思うが、現実ではまだまだ育児に疲れ、悩む女性がたくさんいます。自分自身もまだまだ子育て真っ最中ですが、いつか子どもが自立した時には自分も健康で元気に働けるように前向きに自立に向けて行動して行きたいと思います。
- 子育ては子どもだけでなく、親も含めた支援が必要であること、気づかされました。支援は、その地域で求められていることに気づくことも大事なのだと思います。
- 母親の子育てという部分で、違った視点で見ることができました。「子どもは良い大人と出会う」という言葉がとてもひびきました。保護者はもちろんですが、保護者ではなく大人。たくさんの大人との関わりが大事です。そんな環境をたくさんもつことで育っていくのだと思います。
- 子育てはみんなですという前提で、子どもと一緒にかわいがり、親を受け入れる、「自

己主張しないけど困ったときは助けてあげる」、そんなトトロみたいな気持ちと行動が伴った支援者を目指したいと思いました。

- 「相手がどういう支援を必要としているか」という言葉を常に考えていかなければと感じました。「自己主張せず、寄りそう」言葉に表すのは簡単ですが、実際自分が行うことは難しいことだとも感じました。
- 実際に支援を受けたい方の生の声を聞くことができ、「こんな人に支援されたい」ということがわかり、支援者として、自分がどうあるべきかというイメージができました。親に対してどうしていくのか？という新たな課題もみわかりました。
- 子育て支援をするうえで、“まずは自分を大事にする”は今実感しています。
- 心にひびくお話でした。子どもの自己肯定感を持てるように、自分で歩いていけるように支えていくこと、親を受け容れていくことなど、基本のことだけれども、基本が大事であると改めて思いました。
- 支援をするうえで、環境は人さまざまなので、自分の価値観を押し付けない、ジャッジをしないという言葉がグサッときました。本当に大切なことだと思います。育児の経験談や仕事での経験談を細かく教えていただき、大変勉強になりました。

※公表については受講者より了解済み。

■ヒアリング実施日・場所：2016年12月6日（火）・札幌市男女共同参画センター

講師紹介



勝木 洋子さん 神戸親和女子大学発達教育学部児童教育学科 教授

第1回

神戸大学大学院修士課程修了。兵庫県立大学環境人間学部教授を経て2011年から現職。ひょうご親学習プログラム開発をはじめ、体験をととして気づきを促し、子育てや子育て支援が人生を豊かにしてくれる学習方法を考察している。神戸市男女共同参画審議会会長など多くの自治体の男女共同参画条例や計画策定に参画。女性の就労・家事・育児・介護、ワーク・ライフ・バランス、ダイバーシティなど男女共同参画社会のあり方を探求している。



平島 美紀江さん 合同会社のこたべ 代表取締役

第2回

茨城県生まれ。宮城教育大学卒。営業職、小学校教員を経て、㈱リクルート北海道じゃらんマーケティング企画課入社。妊娠を機に退社するが、「子育てをもっと楽しくしよう」と復職。2007年起業し、食育フリーマガジン「のこたべ」発行、円山動物園での子育てサロン、料理教室、主婦の再就職セミナー、畑のようちえんなどを手がけ、2009年合同会社のこたべ設立。2010年よりコープさっぽろ広報誌「ちょこっ」と編集長を務める。2児の母。



魚岸 あや子さん 一般社団法人ぴんぽんはーと 代表理事

第3回

由仁町生まれ。ベビーシッター、保育士。結婚後、2人の子育てをしながらベビーシッターの資格を取得、2004年に活動をスタート。一人ひとりの気持ちや尊重し、寄り添う姿勢に母親からも子どもからも絶大な信頼を寄せられている。子どものケアに関する資格を生かした講座やお話会、親子遊びの会なども好評を博している。2014年一般社団法人ぴんぽんはーと設立。ベビーシッター養成講座を開講し、江別市の子育てサポーター向け研修の講師も務めるなど、後進の育成にも力を入れている。

プログラム

	日時	内 容
①	2月23日(火) 10:00~12:00	オリエンテーション 「子育てはママだけがするもの？」 性別役割分担意識等にとらわれない視点を持つこと、子育ては支援者や他者の力を借りてよいという認識を持つことの重要性について学びます。多様な人が子育てに関わることが、よりよい子育てにつながることを学びます。
②	2月25日(木) 10:30~12:00	「家庭から地域へー子育て支援の多様化ー」 家庭だけではなく、地域で子育て支援を行うことの大切さを学びます。さまざまな親子、家族の状況を理解し、子育てを応援するイベントを開催している実践例をお話いただきます。
③	2月25日(木) 13:00~14:30	「支援者が関わることで、つながる親子の成長」 支援者が子育てに関わることによって、親も子も「豊かな」人生につながると考える講師の経験を聞き、他者が子育てに関わることの重要性を学びます。
④	3月3日(木) 10:00~12:00	情報交換会「子育て支援団体との交流の場」 さまざまな子育て支援団体をお招きし、子育て支援に携わる方法を探る場として開催します。団体の活動紹介、参加者の自己紹介後、情報交換会を行います。 情報提供：一般社団法人アイエムアイ、株式会社 AsMama、NPO 法人こども學舎、合同会社のこたべ

フィンランド育児パッケージ展 開催

日時：3月3日(木)～14日(月) 9:00～20:00 (最終日は16:00まで) 場所：札幌エルプラザ 情報センター

育児パッケージは、フィンランドで赤ちゃんを迎える家庭に支給される母親手当のひとつです。赤ちゃんの衣類やケア用品など約50点のアイテムを含み、国からの祝福と歓迎のシンボルとして親しまれています。その育児パッケージの実物や歴史を紹介します。

<主催・問い合わせ先>

札幌市男女共同参画センター 指定管理者：(公財) さっぽろ青少年女性活動協会
〒060-0808 札幌市北区北8条西3丁目札幌エルプラザ内 電話：011-728-1255 FAX：011-728-1229
MAIL：jigyoyou@danjyo.sl-plaza.jp HP：http://www.danjyo.sl-plaza.jp/